
戸田さんと僕

長月 夕子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戸田さんと僕

【Nコード】

N2082A

【作者名】

長月 夕子

【あらすじ】

僕の唯一最大の神様へのお願いは、戸田みゆきと同じクラスにならないことだった。

不運

戸田みゆきのことを、この学校で知らない人は多分、いない。それは戸田が、テレビのアイドルみたいにかわいいという事だけじゃない。確かに戸田はかわいい。授業中に先生に笑いかけてるところなんか、なんだかドラマみたいに見える。けれど、それが戸田を学校中の有名人にしているわけじゃない。なんと云うか、つまり戸田は怖いのだ。暴力的に。

とにかく廊下を必死で走っている男子の後ろには必ず、片手を拳げて走っている戸田がいた。教室の隅にも、ベランダにも、戸田に泣かされた男子が必ず一人はいたものだ。戸田には空手師範代の父親がいるとかいないとか噂になっていた。

僕の小学校時代の願いは、戸田と同じクラスにならないようにというただ一つだった。僕は殴られたり蹴られたりなんかしたくない。だからそれだけを神様に祈った。

けれど最後まで神様は願いを聞いてくれなかった。

僕は中学は私立に行くし、男子校だから間違っても戸田と同じ学校になるわけが無い。後たった2年だったのに。

5年のクラス変えのとき、僕は戸田と同じクラスになってしまった。それも出席番号が同じの、隣の席だ。

ああ、神様。

登場

僕は戸田みゆきを、よく知らない事を後悔した。何かしら知っていたら、対処法というものが考えられるからだ。

例えば、何にそんなにキレルのかとか、殴る前に何かしら前触れはあるのかとか、絶対言っちゃいけない、地雷のような言葉があるとか。そういうことだ。

何しろクラスも違うし、接点も無いから、目を合わせずに静かに暮らしていれば、戸田みゆきという災害にあう可能性は低かった。クラスさえ違っていれば、正直どうでもよかった。時々男子が泣いてるのをみかけては、かわいそうになと思うだけで良かったのだ。

僕は悲しくなった。どうして僕がこんな恐怖におびえて暮らさなきゃならないのかと。僕は何もしていないじゃないか。委員会だつて掃除当番だつてさぼった事なんか一度も無い。成績の悪いときだつて、一度として神様のせいにした事なんて無いじゃないか。

ふと目を上げると、窓の外に満開の桜が見えた。僕の席は一番窓際で、学校の桜がよく見える。風が吹いて、花びらがひらりと机の上には舞い降りた。

僕は観念した。こんな事で僕の人生が邪魔される訳にはいかない。なんとか乗り越えよう。だつてずっと仲良くしていた村田君とまた同じクラスになれたじゃないか。村田君とは1年生の頃から親しくて、電車が好きという趣味も一緒だった。僕は去年の平和な生活を思い出す。二人で電車の話をしていればよかった、4年生の今ごろ。

溜息をつく。いや、いけない。こんな事では。僕は村田君の席の方を見る。村田君も僕を見る。その目は僕を哀れんでいた。

互いに見合う、視線をさえぎる様に誰かが目の前に立った。何気なくその人物を見上げた。

戸田みゆきだ。

観察

昼休み、女子が校庭で遊んでいるのを眺めていた。女子と遊んでいるときの戸田はとても楽しそうで、その上やっぱりするごくかわいくて、殴ったり蹴ったりするような人には見えなかった。

5年の始業式、戸田みゆきは、あんなに大きな目なのに、僕のとなんか片隅にも視界に入らないようにすとんと隣の席に座った。僕なんてそんなもんだ。いやそのほうが、かえっていい。ずっと僕の存在など忘れていてほしいものだ。その後僕は、とにかく戸田みゆきに関する情報を得ようと、密かにこうして観察を続けているのだ。同じクラスになって隣の席になって、これでもわかったことがいくつがある。戸田は例外になく運動神経がすごくいい。足も速い。ドッチボールで投げるボールの強さも男子並だ。ポトボールも幅跳びも鉄棒も50メートル走もどれをとってもよくできる。僕はちなみにどれもよくできない。人間は足の速さなんかで価値が決まるもんじゃないから別に僕はかまわないけど。

それから明るいし、いつもニコニコしてるし、女子受けもすごくいい。戸田が怒るところはまだ見たことがないけど、正義感が強いんじゃないかなと思うことは度々ある。曲がったことは嫌いだし、それが先生だって、間違っていたらそれは間違っていると指摘してしまうところがある。そういうところが男子とぶつかるのかなと思ったりする。それから多分、戸田は、男子を敵だとみなしている。掃除や委員会をサボったり、先生のいうことを聞かなかったり、言ってしまうばよくあることが戸田には許せないのかもしれない。僕はその辺抜かりなく、もともと当番とかきちつとやるほうだし、日直だつてきちんちゃった。黒板消しだつて新品かと思紛うくらいきれいにしたし、日誌も丁寧に書いた。どこも戸田に突っ込まれないようにゴミ箱の中まで掃除した。そんな風に僕は一学期を過ごした。

今日は終了式。僕は心からほっとした。今日の日直が終われば、もう夏休みで、来学期は席替えなのだ。このぴりぴりした日々ももう終わりを告げる。僕はなんだかうきうきして黒板消しクリーナーの中で掃除した。日誌も全部書き終わるころ、戸田が教室の窓を閉めた。黒板も水拭きしたし、もう突っ込まれるところは何もないと日誌を持って立ち上がったとき、不意に戸田が僕に話しかけた。「この学校お化け出るって知ってる？」

僕は相当動転して、日誌を落としそうになった。何故なら、戸田が話しかけてくるなんて初めてのことだったから。

「今日の夜さ、確かめてみない？」

戸田はまっすぐに僕を見ながらそう言っている。

僕がそのまま突っ立っていると、口の端をすつと上げてとても意地悪な笑いをした。

「まあ、鈴木が怖いって言うならやめるけど？」

「怖くなんかないよ」

僕はとつさにそう言った。言った瞬間、馬鹿だと思った。

「そう？じゃあ、8時に門のところにて待ってるよ。言っとくけど一人でくるんだよ？来れる？」

そう言うとまたにやりと笑って僕の返事を聞かずに教室から出て行ってしまった。

僕はしばし呆然と立ち尽くした。なんだ、今何の話をしたんだろうか。会話を反芻して僕は愕然とした。

馬鹿な…今日でやっと開放されると思っていたのに、こんなイベントを神様は用意するなんて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2082a/>

戸田さんと僕

2010年10月9日01時12分発行